

「メアリーを変えた一言」

感情的必要のトップテン Part5

今回の「感情的必要のトップテン」は、「愛情」です。

家族に愛情を注ぐ事の大切さは強調してもしすぎる事はありません。以前にも「一日一ハグ」や「触れ愛」、「愛の言語」（インターネットにアクセスできる方は、www.icfire.com/goodall/をご覧ください。）などで書きましたが、「子供は親の愛のおこぼれで育つ」のです。夫婦が互いに、又親が子に愛情をたっぷり注いでください。

レナード先生

最近、メアリー・アン・バードと言う人のことを読みました。メアリーは口蓋裂で生まれ、小さい時から自分は他の人と違うと感じ、その事を嫌がっていました。学校に行き始めると、変形した唇や、曲がった鼻、不均衡な歯、不明瞭な発音をからかわれ、ひどくいじめられました。7才になる頃には、自分は家族以外の誰にも愛されていないし、好かれてもいないと感じるようになりました。

そんな時にメアリーは二年生になり、レナード先生のクラスになりました。

レナード先生は、きれいな、いい香りのする、腕が丸ぼちゃの、温かい目をした女性の先生でした。ある日、毎年行われる聴力検査の時が来ました。生徒は一人一人教室の入り口に立ち、レナード先生が教卓から小声で質問をします。「新しいドレスを買いましたか?」とか、「靴は何色ですか?」と。すると子供が答えます。メアリーの番が来ました。実は、彼女の片方の耳はほとんど聴力がなかったのですが、それを同級生には隠していました。ですから、聞こえない方の耳を検査する時、もう一つの耳を押さえる振りをして、耳から指をそっと離してレナード先生の声が聞こえるようにしたのです。するとレナード先生はこう言いました。「メアリーが私の子供だったらいいのに。」

この一言がメアリーの人生を決定的に変えました。自分の外見に関係なく、大切な人が自分を愛していることに気づいたからです。